

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



エリア・コンサルティング

「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスをが行われ、匠は約一年の試行

「プロジェクトのスーパバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家)東京大学教授、グエナエルニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(フアッション・ジャーナリスト)、「下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりを応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月18日、プレゼンテーションにて

価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。愛媛県選出の匠、和紙作家・佐藤友佳理さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい

錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。



コウゾを水に入れ攪拌する

耐火性や光源の位置も考えて等のアドバイスを受ける。そこで、欄間彫りや組子などの高い技術を持つ県内の建具職人に木枠製作を依頼。県産ヒノキを使い、滑らかな仕上がりを実現。また、導光板照明設計者に協力を仰

佐藤さんの創る和紙プロダクトは独特だ。木枠に糸を張り、そこに和紙を漉き込むことで、風や光を透過し、空間を柔らかく仕切る。和紙の原料となるコウゾに、水や気体分子の吸着機能を持つ多孔性の鉱石ゼオライトを加工した「呼吸する和紙」を開発。一般的な和紙よりも透け感があり、繊細な繊維の濃淡が表現できる。優れた風合いだけで



レクサス松山城北(左)・レクサス松山インター(右)で、佐藤さんの和紙作品を展示



手漉き和紙による、オーダーメイドの内装材をメインに手掛ける佐藤さん。これまで、主に商業施設の衝立やタペストリー、仕切り壁など、国内から海外まで業態や用途に合わせて多様なオーダーにに応じてきた。昨年11月から、レクサス松山城北とレクサス松山インター、2つのショールームで作品が展示されている。

価値あるモノづくりで伝統技術を後世に

なく、湿度調節や消臭機能、シックハウス症候群の原因となる有害な化合物の軽減にも効果を発揮する優れたものだ。直線的な表現が多い和紙プロダクトにひねりに加え、曲線を創り出せないかと、3Dモデラーと協業して試行錯誤。3Dプリンターやレーザーカッターといったデジタル機器を用いながら試作を重ねていく中で、絶妙な角度で木枠を3枚組み合わせて、直線的な構造の中に曲線を生み出すことに成功した。

サポーターメンバーの生駒氏からは、造形や和紙の質感の面白さについては認められながらも、3Dプリンターで製作した接合部品や糸を掛ける木枠の仕上げについて、最終製品として提案するにはさらに精度を上げる必要がある。照明として使うなら、



作品をプレゼンする佐藤さん

「伝統と革新」両方の力で工芸を元気に

モノづくりの原点は、ファッションモデルとして東京ロンドンを拠点に活躍していた頃にさかのぼる。世界的にファストファッションが定着しつつあった時代で、目



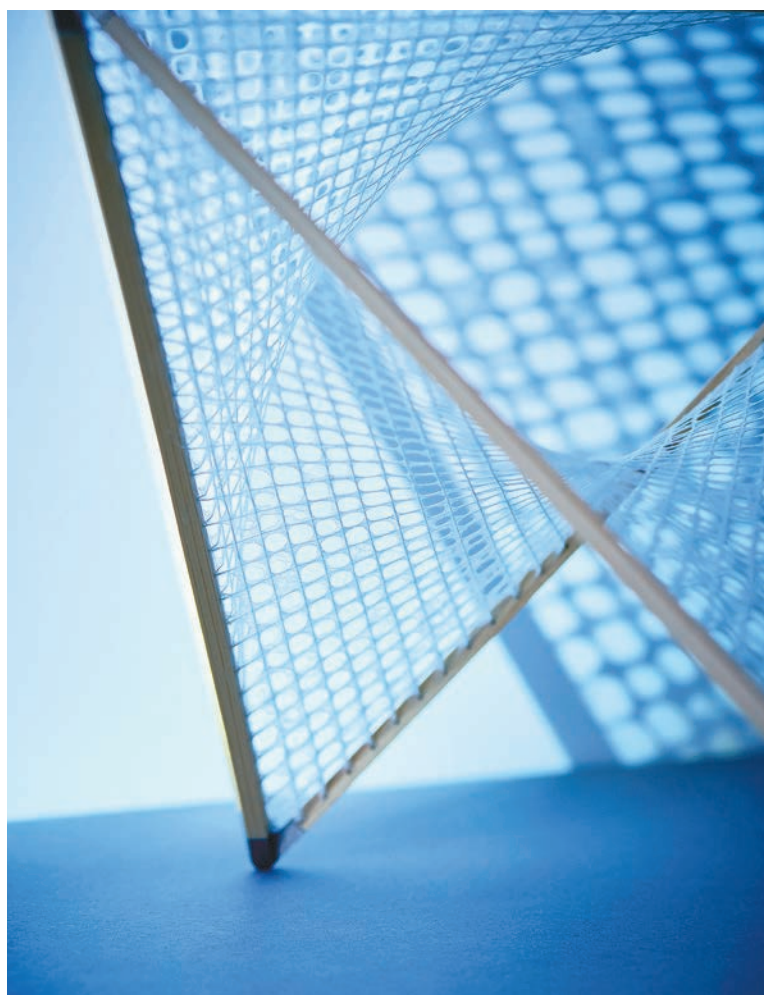
佐藤 友佳理
愛媛県／和紙作家

愛媛県出身。2001年ロンドンでモデルとして活動。2010年桑沢デザイン研究所卒業。自身が育った手漉き和紙の産地である内子町五十崎にて、新しい手法の和紙製作に取り組む。2012年独立、名水百選「観音水」の湧く西予市宇和町明間にアトリエを移す。2016年ロンドンにて初の海外展示。大判和紙のオーダーメイドタペストリー・建具・照明を国内外の店舗や宿泊施設等へ向けて製作する。



佐藤さんの工房

まぐるしく変化し続ける流行や商品サイクルの速さに疑問を抱くようになったという。ものを愛でる時間もなければ、ものを大事に使う余裕もない。そんな状況に漠然とした危機感を抱いた佐藤さんは、デザインを学び、和紙作家へと転身する。紙漉きの伝統が息づく愛媛県内子町出身で、幼い頃から和紙に親しみを感じていた。工房を構える西予市は自然豊かな山間のまち。紙漉きに欠かせない水も豊富で、理想的な環境だ。



完成プロダクト「3D washi object『DRESS』」

佐藤友佳理 愛媛県／和紙作家

生活の中で使われ、長く愛されたものだけが伝統工芸として継承されてきたように、モノづくりに携わる者としては、量よりも質を意識し、価値ある製品を作っていきたい。伝統技術や素材を後世につないでいくためにも、質とのバランスを取りながら適正な価格設定を目指したいと佐藤さんは話す。



和紙の原料コウゾ

今回のプロジェクトに参加したことで、バイヤーや全国の匠たちと交流ができ、大いに刺激を受けたと佐藤さん。プロジェクトが継続され、若手の職人同士がつながることで、また新たな化学変化が起こるのではと期待している。

手工芸の制作工程に3D技術やデジタル機器を導入し、双方の長所を生かしたモノづくりに挑戦できたことも大きな収穫だ。手仕事を補い、発展させるために最新技術を取り入れる。ほかの工芸家にも、その方法を伝えられればと意欲を見せる。

伝統として受け継がれる技術を守るためには、新しい技術を取り入れ、日々進化し続けるものづくりが同時に必要なのはと語る佐藤さんからは、貪欲に時代や人々の感性をくみ取り、プロダクトへと昇華させる和紙デザイナーとしての矜持が垣間見えた。

